

愛とか恋とか

亜戸 健一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鈴鹿御前が、マスターと結ばれるお話。

作者がこういったお話を見かけないので書いた。

後悔はしていない。反省もしていない。

目次

愛とか恋とか

1

愛とか恋とか

マスターに告白された。

まるで校舎裏に呼び出すようにして地下の倉庫に呼ばれ、告白された。

私の期待していた恋ではあったのだが、相手がマスターだとは思わなかった。

返事はその場で返すことができなかった。

マスターも落ち着いてからでいいといってくれた。

それから、しばらく部屋で考え込んでいた。

演じることを忘れて考えていた。

私だってマスターのことが好きだ。

ただ、私は頭の隅で冷静に考えていた。

私はサーヴァントだ。

用が済めば座へ戻ることになる。

それまでに長くはかからないはずだ。

マスターが成人するあたりまでしかいることができないう。

そんなマスターにはもつとふさわしい人がいるはずだ。

マスターが好きだからこそ、付き合うべきではないと思っている。
マシユとかいいのではないだろうか。

デザインベイビーであるとはいえ、サーヴァントではなくれつきとした人間だ。
奇跡的に寿命の問題も解決したそうだし。

好きな人の幸せを願うことは当然だと思う。

私の知識もそう言っている。

すこし……いや、だいぶつらいけど、断ろう。

マスターは納得しないかもなー。



念話でマスターを呼び出した。

前回と同じように地下の倉庫に。

「マスター。この前の返事のことなんだけど」

「ああ、待ってたよ。それで……どう、かな？」

「……ごめんなさい」

「……」

沈黙が続いた。

先に沈黙を破ったのはマスターだった。

「理由を聞いてもいいかな」

「……私がサーヴァントだから」

「そのどこがいけないんだ？」

「だって、この事件が解決されたら私たちは座に帰らなきゃいけないんだよ！だから

……マスターにはもつとふさわしい相手がいるはずなんだよ！」

「それは分かっているつもりだ。でも、鈴鹿の本心が知りたい」

「そんなの……そんなの言えるわけないじゃん！」

当たり前だ。

私だってマスターのことが好きだ。

本心をぶつけてやりたい。

……でも、マスターのことが好きだからこそ、ここは引くべきだ。

「……そっかー。鈴鹿に振られちゃったなあ」

「ちよ、そんな言い方しないでよ」

「でも事実じゃん」

「むむっ……」

「まあ、とりあえず鈴鹿の言ってることはわかったよ。だから、これからも俺の最高のサーヴァントとしてよろしく」

マスターは私の気持ちに気づいていたはずだ。

でも、深く追及してこなかった。

……そういう優しさに惚れちゃったんだろうなあ。

△▼△

数日経ったある日、日本に微小特異点がみつかった。

場所はどこかの海辺らしい。

その調査に私とマシユとマスター、それにあの狐だ。

しかも水着だなんて。浮かれるにもほどがある。

「マスター？今回は大したことのない特異点でしょう？でしたら、任務はあの二人に任せて私たちはバカンスと行きませんか？」

「はあ?!何ふざけたことぬかしてんの!」

「まあまあ。二人とも落ち着いて。今回は小規模だけど何も情報がないんだ。だから情報収集のために二組に分かれよう」

「それじゃあ、わたくしはマスターと」

「いや、玉藻はマシユと行動してほしい」

「えええ!! どうして!」

「玉藻とマシユは水着で海辺を散策できるけど、俺たちはできないからさ」

「ええ、そんな」

「さあ、玉藻さん。行きますよ」

「ああ、マシユさん、引つ張らないでえ」

騒がしい狐がマシユに引つ張られていく様は、ひどく滑稽だった。

「さ、行こうか」

「う、うん」

マスターと二人きり……。

この前の告白のせいなのか、少し意識してしまう。

「マスター。このチーム分けてさ、もしかして……」

「うん。鈴鹿の思ってる通りだよ。マシユも察してくれてたみたいけど」

そんなことを言われると余計意識しちゃうじゃん……。

「情報収集も兼ねたデートのお誘い、受けてくれますか?」

「その言い方はずるいよ……」

内心うれしくてワクワクしているのは秘密。

△▼△

それから、近場の街でデートをしていた。

恋人とは言えない少し歪な関係だけど。

あまりにも楽しくて、この特異点に来た目的を忘れかけた頃にそれは起こった。

「ねえ、マスター。次はあそこに行ってみない？」

「うん、いいね」

「じゃあ、それで——」

決まり、と言いかけた時だった。

パン

銃声がした。

それを聞いた私は、自然とマスターの前に立ちふさがり、刀で銃弾を切り払おうとした。

だが、銃弾は刀で弾かれる事無く私に突き刺さった。

「ぐっ!!」

「鈴鹿?!」

魔術の込められた弾丸だったのだろう。

私にも結構なダメージがある。

……マズったなあ。

「鈴鹿！大丈夫か?!」

「結構ヤバいかも……」

とりあえずマスターの安全のために撃ってきた人間を処理した。

ただ、あとから続々と来ているようだ。

「よししよつと。とりあえず、マスターは二人を呼んで！私が時間を稼ぐから！」

「でも、その傷は?!」

「なんとかなるって。さ、早く！」

「わかった。でも、無理だけはしないでね」

そう言つてマスターは安全な場所に隠れ、二人を念話で呼んでいる。

「さーて。さつきと片づけてマスターとデートの続きと洒落込んじやうよ！」

威勢を張つたはいいものの、実は結構ヤバかったり。

さつきのダメージが霊核に少し効いてるし。

でも、そんなことは気にしていられない。

マスターを守らなきゃ。

△▼△

数は当初の3分の1にまで減つた。

しかし、大分旗色が悪い。

大したことのない特異点って言ったのは誰だっつーの。

私、満身創痍なんですけど！

「すいません、遅くなりました！マシユ・キリエライト、戦闘に介入します！」

「あらあら、いけませんねえ。せつかくのバカンスをめちやくちやにするなんて許せませんわ！」

「来るのが遅いつつーの！」

とにかく、これでメンツがそろった。

「さーて、残りもちやっちゃと片付けちやうよ！」

浮かれた狐が突っ込み、私が切り払っていく。

そして健気に後ろから守ってくれるマシユ。

数がそろえばものの数分で片付いた。

「特異点の原因と思われる聖杯のかけらを回収しました。これにて任務完了です」

「おつかれ、マシユ。それで、この特異点はあとどれくらいでなくなっちゃうのかな」

「あと2，3時間かと」

「そつか。じゃあ鈴鹿、デートの続きといこうか」

「デート？今デートと言いましたねマスター?! どういうこ——」

「はいはい、玉藻さんと私は退場しましょうね」

またズルズルと狐が引きずられて行っている。
やっぱり滑稽だ。

「さて。行こうか、マス……」

そこから先の言葉を紡ぐことができなかつた。

急に力が抜けて、目の前も真つ暗になっていく。

さつき無理をしすぎたせいかな。

マスター、ごめん……。

△▼△

「……」

目が覚めた。

ここはどこだ。

ここがカルデアじゃないことはわかる。

だとすると。

「座に引き戻されていつているのかな……」

座に戻れば私はカルデアでの記憶を無くしてしまうだろう。

……忘れてくないなあ。

特に、マスターの笑顔。

せつかく恋を見つけたっていうのに。

自然と涙がこぼれていく。

「マスターあ……また会いたいよ」

やっぱりマスターのことが好きだ。

あの時、告白を受け入れておけばよかったなんて後悔するぐらいに。

……また、会えるかな。

その時は私から告白してやるんだ。

ああ。本当に会いたいよ。

『鈴鹿！鈴鹿！』

何か聞こえてくる。

『鈴鹿！鈴鹿！』

ああ、マスターの声だ。

すごく安心する。

……けれど、また意識が薄れていく。

今度こそ終わりなのかな。

ありがとう、マスター。

私に恋を教えてくださいありがとうございます。

そして私は意識を失った。

△▼△

「ううっ……」

眩しい。

目を瞬かせながら、目を鳴らしていく。

「ハイハイ……」

大分目が慣れてくると目の前には見慣れた天井が広がっていた。

「私も、マスターのことが好き」

「そっか。じゃあ両思いだったってわけだ」

「うん。だから、私と付き合ってください」

「もちろん」

私の中の理性的な部分が何かを告げているような気がするけど、そんなことはどうでもいい。

だって、恋をするのに理性は必要ないから。

それに、マスターならなんだかんだ事件後も私を座に返してくれなさそうだ。

マシユにだって奇跡を起こしてくれたんだ。

きっと彼女である私だってそれを受ける権利があるはずだ。

だから、これからは自分の愛に素直になっていこう。

私の第二の人生は始まったばかりだ。